

## チェンマイ大学での貢献 (32)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では学部学生への講義について紹介する。既に同じような内容の記事を過去にも紹介したかに記憶するが教育に関わることなので重複しても良いのではないかと、古い話だから再度重要な部分を強調する意味も含めて敢えて報告する。あと一週間もすれば期末試験が始まるという時期と筆者の日本への一時帰国があと数日に迫った木曜日の夜遅く、同じ分野で授業をシェアしているカウンタ・パートの教員から急にメールが入った。内容は「精密農業」についての講義をしてほしいという依頼であった。それも明日の金曜日の午後約1時間を考えているという。この日を逃すと筆者が一時帰国するので期末試験までの間に時間を採る余裕がなくなる急な話ではあるが、快諾を頂ければありがたいというものであった。こうした場合の筆者の基本的対応は「決して断らない、それ以上に機会をもらったことに感謝し、快諾の方向で努力する」という姿勢である。ましてや報酬がどうのこうのという話は頭からない。自分の講義で大学を志す若者が成長してくれればそれが何よりである。ましてやチェンマイ大学の客員教授としての身分をもらっている以上は断る理由もないし、引き受けるのが義務であると認識している。上司の教員が多忙な場合は時間が許す限り代講を快諾し、授業が終われば惜しげも無くファイルを学生にコピーさせ、出欠表をスキャンして「このように講義を終えました」とメールで報告する。また学生には一度の代講でも必ず宿題を課し、期限までの提出を義務付け、この姿勢は大学院生の講義や授業担当においても徹底している。授業中眠っている学生がいれば決して許さず、注意を促し必ず起こす。遅れてきた学生にも対応は厳しい。今回も明日の今日という極めて際どい申し出である。余裕として半日もない。資料を精査し1時間での内容に調整する。幸い3個のファイルが見つかり、内容をチェックすると量的に多いこと、要請のあった講義内容にぴったりというものではなかったが、むしろ「精密農業 (Precision Agriculture)」を含む「ロボティクス (Robotics)」や「植物工場 (Green Factory)」を含む「スマート農業 (Smart Agriculture)」という内容で了解を得て講義に臨んだ。1つのファイルの内容を集約的に、残り2つは学生自身の自習のためにコピーさせて与えることにした。本来講義は90分であるが学部生ということで、英語での講義をどこまで理解できるかという点を考慮し、筆者が話す時間は1時間なれど、学生がより理解を深めるためにカウンタ・パートの教員が同席しタイ語で要約、説明する形式であったことから上記のような時間配分になった。内容は1. 農業の役割、2. 農業機械化の必要性和役割及び目的、3. 世界的人口増に対し食料増産の必要性、4. 食料の安全保障 (特に食の安全と品質管理)、5. 安価で安全かつ高品質の農産物生産と供給には早晚機械化、究極はロボット化へのプロセスが不可欠、6. アセアン経済共同体と世界におけるアジアの役割、7. 資源立国としてのアジア

アの生産力、である。その中で日本の文化を紹介し、如何にタイを含むアジアが裕福かを説いた。すなわち日本では食事の前に「頂きます」と言い、食べ終わると「ご馳走さまでした」と言う。筆者は院生時代にカトリックが経営する学生寮にいた。もちろん寮の代表管理人 (Director) は神父であり、アメリカ人であった。筆者は学部生と違って、院生は大人 (Gentleman) としての扱いであったから、寮の規則にも必ずしも従う必要はなくかなりフレキシブルに対応できる状況にあった。しかし、だからと言って学部生に手本とならない恥ずべき行為は自制することは当然であった。あまり記憶が定かではないが、学部生が基本的に守るべき日常規則は、早朝6時に起床、30分の室内清掃のあと6時半から朝のミサに出ること、ミサは30分間続き礼拝時の言葉は英語、賛美歌はラテン語で歌うという環境で日本語はなし、7時から全員が一同に会し朝食をとるが、ここでも日本語は禁止。その理由は神父様が日本語を理解できない為、日本語で喋ると人の悪口や告げ口を言っているのではないかとの誤解に繋がる事を避けるということであったが、学生にとってはネイティブな英語を聞く絶好の機会でもあった。1日に3回、少なくとも食事で食卓を囲むときは英語でのコミュニケーションが義務であった。そして全員が席につき食事の前に「頂きます (We thank you for god)」と言って食べ始める。食後も同じで「ごちそうさま」と言う。この表現の英語訳は「Let's eat」などと言うものもあるが筆者はあまりにも文化を理解していない表現ではないかと考えている。今回の講義でも筆者は次のようにその意味を説明した。ここで言う「God」は釈迦でもキリストでもない、しいて言えば自然の神であり、誰に対して感謝の意を表しているかということそれは「今日も不自由なく食事を得ることが出来るという恵まれた状況に自分が有ることへの感謝の表現」であると注釈している。これが文化であり、単なる英語への直訳では意味をなさない。こうしたことこそ授業で教えるべきと判断し強調した。同じ仏教国でも有り意の通ずるところがあったらしく学生の中には大きく頷く姿が見られた。まさに聴衆である学生に「本当に理解されたと言う感動 (喜び)」である。さらに付け加えた。「日本は経済大国であり、技術大国でもあるということ」で知られている。しかしタイと日本を比べるとどちらが豊かでしょうか？私はタイのほうが遥かに豊かと考えています。なぜならタイでは、病気にならず事故に出会わなければ死ぬことは先ずないでしょう。また美味しいものが食べたいとなれば高級なホテルやレストランに行けばいくらかでも食することができます。お金がなければ森や山に行きバナナやマンゴを食べることもできます。一方日本ではどうでしょうか？金があっても売ってくれなければ買えません。これでは金があっても意味がありません。最低限生きることが保証されていることが如何に恵まれていることに気づいてください。自分達が毎日当たり前のように食していると、そうした環境が如何に恵まれているかに気づきません。世界には毎日食事を手に入れることができない人が沢山います。このような状況から自分達が何をすべきかを考え、その進むべき方向と自分が果たすべきミッションを見出して欲しい。そのために大学に来たと私は考えていますし、そのような目であなた達を見ています。中には何が目的で大学に来たのか理解に苦しむ姿勢や挙動を見せる学生もいますが、もう一度、

初心に戻って自らに問うてみてください。講義がなくても毎日大学に来て掲示板で「今日はどこでどのような行事が開催されているか、自分の学部のみならず他学部のものまで目を通し、直接出向いて自らの目で確認し、記録するハングリー精神がなければ大学生ではありません。講義だけ出ていれば十分というのは小中学生のレベルです。大学生なら「流石に目的意識が明確だ。それでこそ大学生だ」と頷ける行動を見せて欲しいとたたみかけた。果たしてどこまで筆者の想いが届いたか、期待に膨らむ楽しい待ち時間になって欲しい。



Fig. 1 筆者の講義を要約する教員



Fig. 2 筆者の講義中の学生の聴講姿勢